

■ 研究レポート ■

音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルと社会人基礎力

大 場 ゆかり・森 田 恭 子

はじめに

今日の社会を取り巻く変化，とりわけ，情報通信技術の急速な進展は，ライフスタイルや社会環境に多大な影響をもたらしている。野村総合研究所（2015）は，「10・20年後，日本の労働人口の約49%が技術的には人工知能やロボット等で代替可能になる」との推計結果を得るとともに，創造性，協調性が必要な業務や非定型な業務は将来においても人が担う傾向にあることを確認した。このような時代を生きる子どもや若者には，以前にも増して，非認知的スキル（社会情動的スキル）をはじめとする知識・技術に留まらない資質・能力が求められている。さらに，学校教育段階における若者の職業に関する能力・態度の教育不足（中央教育審議会，2011）も指摘されており，大学教育には，高度な専門性のみならず，ライフキャリアの基礎となる資質・能力の育成，キャリア発達支援的な関わりも同時に求められるようになっていく。

近年，音楽を学ぶことによって得られる知識・技能に加えて，音楽の学びや音楽に関わる活動への参加に伴って培われる資質・能力に対する社会的期待が高まっている。音楽大学や音楽専攻の学生を積極的に採用する企業の存在（大内，2015；久保田，2017）は，その一例であろう。音楽学習や音楽活動への参加経験が，音楽知識・技能の向上，演奏パフォーマンスの卓越に留まらず人間的成長をもたらすことについては，これまで経験的に語られるとともに，その実証が試みられてきた。たとえば，久保田（2017）は音楽専門教育を通じた職業的キャリア発達に関する実態研究を行い，音楽大学学部生の社会人基礎力¹⁾は，学年が上がるにつれて高まること，対人スキルや目標達成力（障害があっても目標を達成しようとする力）が高いことを明らかにした。また，ハーバード大学をはじめとする米国大学の事例検討を行った菅野（2015）は「音楽を学ぶ（専門的に音楽を学ぶ）」のみならず，「音楽で学ぶ（リベラル・アーツとして音楽を学ぶことを通して人間や世界を学び豊かな人格形成や人間理解に役立てる，スキルを高めるために知識を応用する力を獲得するための機会・方法として音楽を学ぶ）」という視点を示している。

本研究では，音楽を学ぶこと（専門的な知識・技能の習得）と音楽で学ぶこと（心理・社会的ス

1) 経済産業省では，平成17年7月，産学官から有識者を集めた「社会人基礎力に関する研究会」を開催し，幅広い議論の上で，平成18年2月，職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力」と名付け，その定義や育成・評価，活用等のあり方について，考え方の整理を行った（経済産業省，2008）。

キルをはじめとする資質・能力の育成)の二視点を統合し、音楽大学在学生在を対象に、音楽知識・技能の習得に留まらない学びについて、音楽学習・音楽活動を包含する音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルと、広く社会で多様な人々と関わる際に求められる社会人基礎力の関連から検討することを目的とした。

方 法

2018年4月から9月、音楽大学在学生在271名を対象に、演奏パフォーマンスに関わる心理・社会的スキルについて、集合調査法による質問紙調査を実施した。調査内容は、社会人基礎力、演奏パフォーマンスに関する心理的要因、レジリエンス(苦境に立たされても回復する力、精神的回復力)、グリット(やり抜く力)とした。音楽知識・技能の習得に留まらず、広く社会で多様な人々と関わる際に求められるスキルとして社会人基礎力を、また、音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルとして演奏パフォーマンスに関わる心理的要因と音楽学習・音楽活動の継続に寄与するレジリエンスならびにグリットを採用した。

社会人基礎力 齊藤・上本(2017)による「社会人基礎力チェック(36項目、3件法)」を用いた。社会人基礎力は、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力であり、3つの能力/12の能力要素から構成されている【図1】。12の能力要素は各3項目からなり、得点範囲は0-6点であった。3つの能力のうち「前に踏み出す力」「考え抜く力」はそれぞれ3の能力要素からなり、得点範囲は0-18点であった。「チームで働く力」は6の能力要素からなり、得点範囲は0-36点であった。得点が高いほど、高い社会人基礎力を有していることを示した。

演奏パフォーマンスに関わる心理的要因 徳永・橋本(2000)による「心理的競技能力診断検査(5因子12下位尺度52項目、5件法)」の下位尺度「競技意欲(忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲)」「精神の安定集中(自己コントロール、リラックス、集中力)」「自信」「協調性」に該当する36項目を参考に、演奏パフォーマンス場面に求められる心理的要因の質問項目を選定した。因子構造を確認するため因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、2因子を抽出した。因子負荷量が低い項目および2因子ともに高い因子負荷量を示した12項目を除外した24項目について、再度、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った【表1】。第Ⅰ因子は「精神の安定集中」、第Ⅱ因子は「意欲・自信」と命名し、演奏パフォーマンスに関わる心理的要因をみる項目とした。いずれの因子も12項目から構成され、得点範囲は12-60点であった。得点が高いほど、演奏パフォーマンス場面における心理的スキルが高いことを示した。

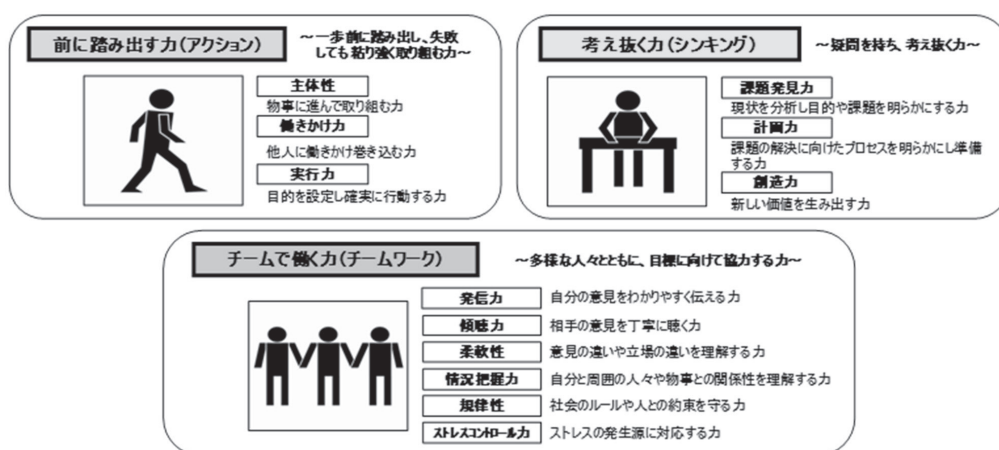
レジリエンス 人生の危機や挑戦などに建設的・積極的に適応し、それを克服して自己の成長に結び付ける特質を、小塩・中谷・金子・長峰(2002)による「精神的回復力尺度(21項目、5件法)」を用いて測定した。新たな挑戦に対する態度に関する「新奇性追求」因子(7項目、得点範囲7-35点)、感情コントロールに関する「感情調整」因子(9項目、得点範囲9-45点)、将来への希望や目標に

関する「肯定的な未来志向」因子（5項目、得点範囲5-25点）の3因子から構成された。得点が高いほど、高いレジリエンスを有していることを示した。

グリット 成功者が有する特徴であるとともに、長期的な目標の達成を予測する概念について、西川・奥上・雨宮（2015）による「日本語版 Short Grit 尺度（2因子8項目、5件法）」を用いて測定した。一つの物事に対する取り組み態度（長期にわたって一つのことに熱意や情熱をもって取り組む姿勢）に関する「根気」因子と、その取り組みの継続（挫折や困難などがあっても粘り強く努力したり、立ち直す姿勢）に関する「関心の一貫性」因子との2因子から構成された。得点範囲はそれぞれ4-20点であった。得点が高いほど、グリットが高いことを示した。

レジリエンスもグリットも、ストレスに対処する特性としてとらえられ、社会的な成功や達成過程において直面する困難な状況に対処し、適応を導く力という共通項がある。しかし、グリットは長期的な目標達成について、レジリエンスは、より幅の広い逆境を対象とし、精神的な落ち込みからの立ち直りについての概念である（国立教育政策研究所、2017）点が異なっている。

調査は日本心理学会倫理規程（2011）に則って実施した。調査の実施に先立ち、調査対象者に対して、1）研究の目的ならびに調査内容、2）収集されたデータの取り扱いと管理、3）個人情報の保護、4）調査への協力に伴って不利益がもたられることが無いこと、5）調査への協力が任意であること、6）研究成果の公表方法、7）研究終了後の対応について説明を行い、同意を得た。なお、分析にあたっては、IBM SPSS Statistics version 21（IBM 社製）を用いた。



〔図1〕社会人基礎力

（経済産業省 社会人基礎力説明資料「社会人基礎力の普及・促進」より）

〔表 1〕演奏パフォーマンスに関わる心理的要因の因子分析結果

因子名 (α 係数)	項目 番号	質問内容	因子 F1	F2
I 精神の安定集中 ($\alpha=.97$)	19 *	本番になると精神的に動揺する	.89	-.19
	7 *	落ち着いたパフォーマンスや動きができなくなる	.88	-.12
	45 *	本番になるとプレッシャーを感じる	.86	-.30
	5 *	本番になると自分をコントロールできなくなる	.85	-.15
	18 *	緊張していつもの演奏(動き)ができなくなる	.84	-.16
	32 *	本番前になると不安になる	.84	-.27
	20 *	冷静さを失うことがある	.84	-.16
	33 *	本番になると、聴衆のことが気になって注意を集中できない	.82	-.14
	6 *	勝敗や結果、成績を気にしすぎて緊張する	.81	-.19
	44 *	顔がこわばったり、手足がふるえたりする	.80	-.26
	46 *	演奏中、結果や成績が気になって集中できない	.73	-.20
	31 *	気持ちの切り替えが遅い	.59	-.33
II 意欲・自信 ($\alpha=.96$)	2	大きな舞台になればなるほど闘志がわく	-.11	.87
	8	プレッシャーのもとでも実力を発揮できる自信がある	.01	.85
	1	苦しい場面でも、我慢強くパフォーマンスをすることができる	-.19	.82
	3	自分の可能性に挑戦する気持ちで演奏している	-.29	.82
	15	本番になると闘争心がわいてくる	-.20	.81
	41	大事な本番になると精神的に燃えてくる	-.28	.79
	47	どんな場合でも、自分の演奏(パフォーマンス)ができる自信がある	-.07	.79
	28	競争相手やライバルが強いほどファイトがわく	-.23	.76
	27	粘り強い演奏ができる	-.35	.76
	14	忍耐力を発揮できる	-.32	.74
	21	自分の能力に自信を持っている	-.17	.67
	40	身体的な苦痛や疲労に耐えることができる	-.36	.60
寄与率			36.19	32.44
累積寄与率			36.19	68.63

注) *項目は逆転項目

結 果

調査対象者 271 名のうち有効回答が得られた 234 名（平均年齢 18.62±.94 歳）の回答を分析対象として、1) 社会人基礎力の得点傾向、2) 音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルと社会人基礎力の関係、3) 演奏パフォーマンスに関わる心理・社会的スキルの社会人基礎力得点への寄与、の 3 点について検討した。

1) 社会人基礎力

社会人基礎力の得点傾向を検討するため、社会人基礎力の合計得点、3つの能力／12の能力要素別の合計得点について記述統計量を求めた〔表 2〕。加えて、3つの能力／12の能力要素は、それぞれ得点範囲が異なることから、平均値を各得点範囲最大値で除した値（得点率）を求めた。その結果、3つの能力のうち、チームで働く力に対する自己評価が最も高い得点率（68.4%）を示した。

また、12の能力要素については、傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く：80.3%）が最も高い得点率を示し、規律性（社会のルールや人との約束を守る：77.6%）、柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する：76.3%）が続いた。

〔表2〕社会人基礎力得点の平均値と標準偏差

社会人基礎力 (3つの能力/12の能力要素)	平均値	標準偏差	得点範囲	得点率
社会人基礎力 合計	46.38	(10.11)	0-72	64.4%
前に踏み出す力	11.24	(3.35)	0-18	62.5%
主体性	4.04	(1.34)	0-6	67.4%
働きかけ力	3.42	(1.58)	0-6	57.1%
実行力	3.78	(1.45)	0-6	62.9%
考え抜く力	10.52	(3.39)	0-18	58.4%
課題発見力	3.54	(1.47)	0-6	59.0%
計画力	3.84	(1.59)	0-6	63.9%
想像力	3.15	(1.65)	0-6	52.4%
チームで働く力	24.62	(5.32)	0-36	68.4%
発信力	2.86	(1.69)	0-6	47.6%
傾聴力	4.82	(1.26)	0-6	80.3%
柔軟性	4.58	(1.35)	0-6	76.3%
状況把握力	4.15	(1.45)	0-6	69.2%
規律性	4.66	(1.45)	0-6	77.6%
ストレスコントロール力	3.55	(1.46)	0-6	59.2%

注) 得点率: 平均値を得点範囲最大値で除した値。

2) 音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルと社会人基礎力

音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルの習熟度と社会人基礎力の関係を明らかにするため、演奏パフォーマンスに関わる心理的要因、レジリエンス、グリットの得点から、上位・下位それぞれ25%に該当する対象者を抽出し、社会人基礎力得点についての一元配置分散分析を行った〔表3～5〕。社会人基礎力得点（合計）、3つの能力については、演奏パフォーマンスに関わる心理的要因、レジリエンス、グリットいずれの心理・社会的スキルの習熟度によっても有意差が認められた。一方、12の能力要素については、演奏パフォーマンスに関わる心理的要因における課題発見力、計画力、柔軟性、状況把握力、規律性、グリットにおける柔軟性において有意差が認められなかった。

〔表 3〕 演奏パフォーマンスに関わる心理的要因得点による社会人基礎力得点の比較

社会人基礎力 (3つの能力/12の能力要素)	演奏パフォーマンスに関する心理的要因						F値
	低群 (N=61)		高群 (N=59)		全体 (N=120)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
社会人基礎力 合計	42.49	(9.06)	49.44	(11.47)	45.91	(10.85)	13.62 ***
前に踏み出す力	9.62	(3.26)	12.39	(3.44)	10.98	(3.61)	20.49 ***
主体性	3.59	(1.31)	4.27	(1.50)	3.93	(1.44)	7.06 **
働きかけ力	2.89	(1.75)	3.83	(1.60)	3.35	(1.74)	9.51 **
実行力	3.15	(1.41)	4.29	(1.37)	3.71	(1.50)	20.21 ***
考え抜く力	9.92	(3.21)	11.15	(3.71)	10.53	(3.51)	3.81 +
課題発見力	3.31	(1.48)	3.78	(1.66)	3.54	(1.58)	2.66
計画力	3.84	(1.58)	3.98	(1.69)	3.91	(1.63)	.24
想像力	2.77	(1.50)	3.39	(1.61)	3.08	(1.58)	4.77 *
チームで働く力	22.95	(4.96)	25.90	(5.69)	24.40	(5.51)	9.17 **
発信力	2.26	(1.67)	3.44	(1.67)	2.84	(1.77)	14.88 ***
傾聴力	4.49	(1.39)	4.92	(1.15)	4.70	(1.29)	3.31 +
柔軟性	4.36	(1.34)	4.56	(1.43)	4.46	(1.38)	.62
状況把握力	3.80	(1.59)	4.27	(1.53)	4.03	(1.57)	2.70
規律性	4.67	(1.43)	4.75	(1.48)	4.71	(1.45)	.78
ストレスコントロール力	3.36	(1.32)	3.97	(1.56)	3.66	(1.47)	5.27 *

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

〔表 4〕 レジリエンス得点による社会人基礎力得点の比較

社会人基礎力 (3つの能力/12の能力要素)	レジリエンス						F値
	低群 (N=59)		高群 (N=62)		全体 (N=121)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
社会人基礎力 合計	38.76	(8.62)	54.32	(8.04)	46.74	(11.39)	105.50 ***
前に踏み出す力	9.14	(3.56)	13.34	(2.69)	11.29	(3.78)	53.92 ***
主体性	3.49	(1.54)	4.60	(1.12)	4.06	(1.45)	20.57 ***
働きかけ力	2.88	(1.75)	4.03	(1.49)	3.47	(1.72)	15.17 ***
実行力	2.76	(1.45)	4.71	(1.18)	3.76	(1.64)	65.74 ***
考え抜く力	8.59	(3.01)	12.63	(3.26)	10.66	(3.73)	49.97 ***
課題発見力	3.17	(1.62)	4.16	(1.32)	3.68	(1.55)	13.68 ***
計画力	3.41	(1.61)	4.44	(1.40)	3.93	(1.59)	14.13 ***
想像力	2.02	(1.31)	4.03	(1.70)	3.05	(1.82)	53.15 ***
チームで働く力	21.03	(5.06)	28.35	(4.14)	24.79	(5.88)	76.21 ***
発信力	2.10	(1.60)	3.52	(1.59)	2.83	(1.74)	23.76 ***
傾聴力	4.20	(1.49)	5.39	(0.88)	4.81	(1.35)	28.60 ***
柔軟性	4.12	(1.57)	4.94	(1.17)	4.54	(1.43)	10.63 **
情況把握力	3.24	(1.48)	4.94	(1.20)	4.11	(1.59)	48.39 ***
規律性	4.25	(1.57)	5.16	(1.15)	4.72	(1.44)	13.24 ***
ストレスコントロール力	3.12	(1.37)	4.42	(1.21)	3.79	(1.44)	30.85 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$

〔表5〕グリット得点による社会人基礎力得点の比較

社会人基礎力 (3つの能力/12の能力要素)	グリット						F値
	低群 (N=59)		高群 (N=68)		全体 (N=127)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
社会人基礎力 合計	39.29	(9.49)	51.57	(10.14)	45.87	(11.58)	49.20 ***
前に踏み出す力	9.02	(3.53)	12.96	(2.89)	11.13	(3.75)	47.80 ***
主体性	8.56	(3.08)	11.71	(3.52)	10.24	(3.67)	28.32 ***
働きかけ力	21.71	(5.34)	26.91	(5.26)	24.50	(5.88)	30.44 **
実行力	3.32	(1.46)	4.65	(1.13)	4.03	(1.45)	33.27 ***
考え抜く力	2.88	(1.63)	3.85	(1.52)	3.40	(1.64)	12.08 ***
課題発見力	2.81	(1.61)	4.46	(1.21)	3.69	(1.63)	42.64 ***
計画力	2.90	(1.39)	3.94	(1.44)	3.46	(1.51)	17.10 ***
想像力	3.12	(1.74)	4.40	(1.35)	3.80	(1.67)	21.62 **
チームで働く力	2.54	(1.71)	3.37	(1.66)	2.98	(1.72)	7.63 ***
発信力	2.03	(1.61)	3.25	(1.61)	2.69	(1.72)	17.99 ***
傾聴力	4.32	(1.49)	5.21	(1.00)	4.80	(1.32)	15.74 **
柔軟性	4.53	(1.37)	4.65	(1.29)	4.59	(1.32)	.27
状況把握力	3.73	(1.60)	4.66	(1.38)	4.23	(1.55)	12.50 **
規律性	4.08	(1.77)	5.15	(1.10)	4.65	(1.54)	16.94 ***
ストレスコントロール力	3.02	(1.42)	4.00	(1.53)	3.54	(1.55)	13.98 ***

** $p<.01$, *** $p<.001$

3) 演奏パフォーマンスに関わる心理・社会的スキルの社会人基礎力への寄与

社会人基礎力得点と、音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルとの関連について検討するため、社会人基礎力を従属変数、音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキル（演奏パフォーマンスに関わる心理的要因、レジリエンス、グリット）を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、社会人基礎力の合計得点にはレジリエンス（ $\beta = .433$, $p<.001$ ）とグリット（ $\beta = .206$, $p<.01$ ）の寄与が認められた〔表6〕。前に踏み出す力にはレジリエンス（ $\beta = .261$, $p<.001$ ）、グリット（ $\beta = .262$, $p<.01$ ）、演奏パフォーマンスに関わる心理的要因（ $\beta = .135$, $p<.05$ ）の寄与が認められた〔表7〕。さらに、考え抜く力（ $R^2=.171$, $p<.001$ ）にレジリエンス（ $\beta = .414$, $p<.001$ ）が、チームで働く力（ $R^2=.228$, $p<.001$ ）にもレジリエンス（ $\beta = .477$, $p<.001$ ）が有意に関連していた。

〔表6〕社会人基礎力を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）の結果

Step		R ²	累積R ²	β	t
1	レジリエンス	.290	.290	.433	6.46 ***
2	グリット	.031	.322	.206	3.08 **

** $p<.01$, *** $p<.001$

〔表7〕 社会人基礎力「前に踏み出す力」を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）の結果

Step		R ²	累積R ²	β	t
1	レジリエンス	.206	.206	.261	3.53 **
2	グリット	.055	.261	.262	3.75 ***
3	演奏パフォーマンスに関わる心理的要因	.015	.276	.135	2.03 *

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

考 察

1) 社会人基礎力

本研究の対象者は、社会人基礎力について、チームで働く力、特に傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く）、規律性（社会のルールや人との約束を守る）、柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する）に対して最も高い自己評価を示した。

久保田（2017）は、音楽大学学部生の社会人基礎力は対人スキルや目標達成力（障害があっても目標を達成しようとする力）が高いことを明らかにした。目標達成力（本研究において目標達成力に相当する能力要素は実行力とみなした）については明らかな傾向を見出すには至らなかったものの、他者との関わりや協働において求められる他者に対する尊重や受容性に関する力が高い傾向は本研究においても同様であった。このことから、音楽大学在学生在が、社会で広く人と関わる場面で発揮される特徴の一つとして、他者との関係における適応性をとらえていることが示唆された。

2) 音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルと社会人基礎力

社会人基礎力の合計得点ならびに3つの能力の得点については、演奏パフォーマンスに関する心理的要因、レジリエンス、グリットで測定された心理・社会的スキルの習熟度によって差が認められることが明らかになった。すなわち、音楽経験を通して育まれた心理・社会的スキルが高い者ほど、自らに備わっていると考える社会人基礎力を高く評価している傾向にあった。

一方、12の能力要素の中には、音楽経験を通して育まれた心理・社会的スキルの習熟度による有意差が認められないものがあった。たとえば、課題発見力（現状を分析し、目的や課題を明らかにする）、計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する）、柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する）、情況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する）、規律性（社会のルールや人との約束を守る）の自己評価は、演奏パフォーマンスに関する心理的要因の得点が高い者も低い者も同様の傾向が示された。これらの能力要素は、音楽学習や音楽経験に従事する中で必要とされる力であるため、音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルの習熟度に関わらず、共通して育成され、自らに備わっていると考えるに至った可能性がある。また、音楽大学学部生の

社会人基礎力は学年が上がるにつれて高まる（久保田，2017）ことが明らかにされていることから，本研究の対象者の音楽学習や音楽経験が同質であることが結果に影響していたことが推察された。

「スキルがスキルを生む（現在，スキルを向上させることが，将来，さらに多くのスキルを発達させることにつながる；経済協力開発機構，2018）」と言われるように，音楽経験や音楽経験を通して育まれた心理・社会的スキルは，社会人基礎力等，汎用的スキルの獲得や向上につながることが示唆された。

3) 演奏パフォーマンスに関わる心理・社会的スキルの社会人基礎力への寄与

社会人基礎力を従属変数，音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキル（演奏パフォーマンスに関わる心理的要因，レジリエンス，グリット）を独立変数とする重回帰分析の結果，社会人基礎力の合計得点は，レジリエンスとグリットによって予測されることが明らかになった。3つの能力については，前に踏み出す力にはレジリエンス，グリッド，演奏パフォーマンスに関わる心理的要因の寄与が，考え抜く力，チームで働く力にはレジリエンスの寄与が認められた。

社会人基礎力の合計得点，3つの能力（前に踏み出す力，考え抜く力，チームで働く力）のいずれに対しても，レジリエンスの寄与が認められた。このことから，音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルとして本研究で用いた指標のうち，社会人基礎力に最も関連がある要因はレジリエンスであることが明らかになった。レジリエンスは，日常生活における様々な適応上の指標と正の関連が認められている（国立教育政策研究所，2017）。これは，社会人基礎力とレジリエンスの関連性を明らかにした本研究の結果と一致する。ストレスに対処する特性であり，人生の危機や挑戦など困難な状況に適応し，克服して，それを自己の成長につなげる特質としてのレジリエンスの向上は，社会人基礎力の向上の基盤となることが推察された。

さらに，レジリエンスには，年齢と正の相関が認められることが明らかにされている（上野・平野・小塩，2017）。成長に伴ってレジリエンスが向上することを示す結果がある一方で，経験の重要性を指摘する研究もある。たとえば，スポーツ経験と資質的・獲得的レジリエンスの関連を検討した榎本・金城・荒井（2016）は，スポーツ活動年数を重ねることはレジリエンスと関連せず，スポーツ活動を通じた成長感と資質的レジリエンスの関連を指摘している。また，課題の継続期間ではなく，伸び悩み経験の達成や克服によってレジリエンスが高められる可能性があることも示されている（本多，2018）。これらのことから，音楽経験そのものが直接的にレジリエンスを高め，社会人基礎力の向上に寄与しているのではなく，音楽学習や音楽活動が，成長感や達成感，課題克服を経験する機会となり，その結果としてレジリエンスが高まり，社会人基礎力の向上に寄与していることが推察された。

今日の社会経済的状况から，認知的スキルと同様に，あるいは，それ以上に，個人が目標を追求し，他者と協働し，感情をコントロールする際に重要な役割を担う非認知的スキル（社会情動的スキル）の育成が求められている。野村総合研究所（2015）は，将来においても人工知能等による代替可能

性が低い創造性・協調性が求められる非定型な職業 100 種を示した。その中には、クラシック演奏家、声楽家、作詞家、作曲家、音楽教室講師、レコードプロデューサー、録音エンジニア、ミュージシャン、幼稚園・小学校・中学校・大学教員等、従来から音楽大学卒業後のキャリアとして選ばれている職業が数多く挙げられた。これらの職業は、非認知的スキルを要する職業であることから、音楽学習・音楽活動を包含する音楽経験は、非認知的スキルを発達させる機会となりうるものであると言える。また、音楽のレッスンは、子どもの学力や知能指数を高めるとともに、音韻意識や単語の解読を改善することが明らかにされている（OECD 教育研究革新センター，2016）。すなわち、音楽学習・音楽活動を包含する音楽経験は、認知的スキル、非認知的スキルの双方を獲得・向上する機会となる。音楽経験を通して育まれた認知的・非認知的スキルを、非音楽的課題に転移・般化させ、創造性・協調性が求められる非定型な業務・職業において広く活躍する人材の育成を視野に入れた音楽教育の実践が期待される。

結 論

本研究は、音楽大学在学学生を対象に、音楽知識・技能の習得に留まらず広く社会で多様な人々と関わる際に求められるスキル（社会人基礎力）と、音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキル（演奏パフォーマンスに関わる心理的要因、音楽学習・音楽活動の継続に寄与するレジリエンスならびにグリット）との関連を検討した。その結果、1) 音楽大学在学学生は、他者との関係における適応性を高く自己評価していること、2) 演奏パフォーマンスに関する心理的要因、レジリエンス、グリットで測定された心理・社会的スキルの習熟度によって社会人基礎力の高さが異なること、3) 音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルのうちレジリエンスが最もよく社会人基礎力を予測する要因であることが明らかになった。今後、音楽学習や音楽経験の多寡、音楽大学在学学生と音楽を専攻していない大学生との比較、音楽経験開始時から同一対象者を長期追跡して心理・社会的スキルの習熟過程を明らかにする縦断的調査を行うことが求められる。

■ 参考文献 ■

- ・上野雄己，平野真理，小塩真司 2017 「日本人成人におけるレジリエンスと年齢との関連―大規模調査による検討―」『日本健康心理学会大会発表論文集』30: 76。
- ・榎本恭介，金城光，荒井弘和 2018 「スポーツ経験とレジリエンスの関連：資質的・獲得的レジリエンスの観点から」『日本体育学会第 67 回大会予稿集』：139。
- ・OECD 教育研究革新センター（編著）2016 『アートの教育学 革新型社会の開く学びの技』 篠原康生，篠原真子，巖岩晶（訳） 東京：明石書店。
- ・大内孝夫 2015 『「音大卒」は武器になる』 東京：ヤマハミュージックメディア。

- ・小塩真司, 中谷素之, 金子一史, 長峰伸治 2002 「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—」『カウンセリング研究』 35: 57-65。
- ・嘉瀬貴祥, 上野雄己, 大石和男 2018 「首尾一貫感覚のライフキャリア・レジリエンスに対する関連の検討」『日本健康心理学会大会発表論文集』 31: 61。
- ・菅野恵理子 2015 『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる 21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』 東京: アルテスパブリッシング
- ・久保田慶一 2014 『科学研究費助成事業研究成果報告書 高等教育機関における音楽専門教育を通じた職業的キャリア発達に関する実態研究 (課題番号 23652041)』 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-23652041/23652041seika.pdf> (2018年11月1日閲覧)。
- ・久保田慶一 2017 『2018年問題とこれからの音楽教育』 東京: ヤマハミュージックメディア。
- ・経済協力開発機構 (編著) 2018 『社会情動的スキル—学びに向かう力』 無藤隆, 秋田喜代美 (監訳) 荒牧美佐子, 都村聞人, 木村治生, 高岡純子, 真田美恵子, 持田聖子 (訳) 東京: 明石書店。
- ・経済産業省 2006 『社会人基礎力に関する研究会—「中間とりまとめ」—』
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (2018年11月1日閲覧)
- ・経済産業省『社会人基礎力』
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2018年11月1日閲覧)。
- ・経済産業省『社会人基礎力説明資料「社会人基礎力の普及・促進」』
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/pr1.ppt> (2018年11月1日閲覧)。
- ・経済産業省 2008 『今日から始める社会人基礎力の育成と評価～将来の日本を支える若者があふれ出す!～』
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2008kyoukara.pdf> (2018年11月1日閲覧)。
- ・国立教育政策研究所 2017 『非認知的 (社会情動的) 能力の発達と科学的健闘手法についての研究に関する報告書 (研究代表者: 遠藤利彦)』。
- ・齊藤和孝, 岡安孝弘 「大学生のソーシャルスキルと自尊感情がレジリエンスに及ぼす影響」『健康心理学研究』 27(1): 12-19。
- ・齊藤博, 上本裕子 2017 『大学1年からのキャリアデザイン実践』 東京: 八千代出版。
- ・ダックワース, アンジェラ 2016 『やり抜く力—人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』 東京: ダイアモンド社。
- ・中央教育審議会 2011 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm (2018年11月1日閲覧)。
- ・徳永幹雄・橋本公雄 2000 『心理的競技能力診断検査 (DIPCA.3)』 福岡: トーヨーフィジカル。
- ・奈須正裕 2017 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東京: 東洋館出版社
- ・西川一二, 奥上紫緒里, 雨宮俊彦 2015 「日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度の作成」『パーソナリティ

研究』24(2): 167-169。

- ・日本心理学会 2011 『公益社団法人日本心理学会倫理規程（第3版）』。
- ・野村総合研究所 2015 「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に～601種の職業ごとに、コンピューター技術による代替確立を試算～」『野村総合研究所ニュースリリース 2015年12月2日』。
http://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/news/newsrelease/cc/2015/151202_1.pdf
(2018年11月1日閲覧)。
- ・ファデル C., ビアリック M., トリリング B. 2016 『21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識, スキル, 人間性, そしてメタ学習』 岸学(監訳) 関口貴裕, 細川太輔(編訳) 東京学芸大学次世代教育研究推進機構(訳) 京都: 北大路書房。
- ・本多麻子 2018 「長期的課題の伸び悩みと達成がもたらす恩恵」『日本健康心理学会大会発表論文集』31: 27。
- ・森敏昭, 清水益治, 石田潤, 富永美穂子, Hiew, Chok. C. 2002 「大学生の自己教育力とレジリエンスの関係」『学校教育実践学研究』8: 179-187。

付記 本研究において開示すべき利益相反はない。

Fundamental Competencies for Working Persons Fostered through Musical Experiences

Yukari OBA and Kyoko MORITA

Besides musical knowledge and skills, competencies learned through music lessons and musical activities are highly expected by the society recently. Sugano (2015) mentioned that music can be learned in the following two ways. One is learning music as a professional skill, the other learning music as liberal arts to understand human beings and human world or to cultivate application competency of their knowledge. Competency-based education reform recognized as a worldwide trend today. Actually, the Ministry of Economy, Trade and Industry proposed 'Fundamental Competencies for Working Person' in 2006.

The purpose of this study is to find how musical experience fosters the 'Fundamental Competencies for Working Person' in the light of the following three factors:

a) psychological skills of music performance, b) resilience and c) grit.

The result of multiple regression analysis showed that resilience is a major predictable factor for the 'Fundamental Competencies for Working Person'.

Human creativity and cooperativeness will still be required in the future because AI cannot substitute for their uniqueness. Lastly, how can music lessons and activities help foster people who are actively involved in atypical business world is also discussed.

近年、音楽を学ぶことによって得られる知識・技能に加えて、音楽の学びや音楽に関わる活動への参加に伴って培われる資質・能力に対する社会的期待が高まっている。「音楽を学ぶ（専門的に音楽を学ぶ）」のみならず、「音楽で学ぶ（リベラル・アーツとして音楽を学ぶことを通して人間や世界を学び豊かな人格形成や人間理解に役立て、知識を応用する力を獲得するための機会・方法として音楽を学ぶ）」という視点（菅野，2015）も示されている。

本研究は、職場や地域社会で求められる基礎的な力として経済産業省（2006）が示した社会人基礎力について、音楽学習や音楽活動への参加経験を通して育まれる心理・社会的スキル（演奏パフォーマンスに関する心理的要因、レジリエンス、グリット）から検討することを目的とした。音楽経験を通して育まれる心理・社会的スキルの習熟度によって社会人基礎力が異なること、特に、レジリエンスが社会的基礎力を予測する因子となっていることが明らかになった。

人工知能等による代替が難しく、将来においても人間が担うと考えられている創造性・協調性が求められる非定型的な職業・業務において広く活躍することができる人材の育成に音楽経験が寄与する可能性と、今後の音楽教育の方向性についての示唆が得られた。